

【乙女桜】

時は寛永9年、白河の関に築城の名手あり、その名は丹羽長重公
ここは奥羽を警戒する重要な拠点でありました、幕府は伊達政宗の侵攻を阻止する為に
白河小峰城を頑強な城に改築するように丹羽長重に厳命を下したのです。
長重の最も信頼を寄せる藩士「和知平左エ門」を小峰城の改築責任者に抜擢しました。
建築指揮の技量も優れており部下から厚い信頼を寄せられるかたわら、戦国武士にあっては
珍しく心根の優しい男でもありました。
最愛の妻「とよ」を早くに亡くしてからは、一粒種の姫「乙女」をたいそう可愛がっていた
そうです。

ここは和知平左エ門の屋敷、平左エ門を前にして「乙女」が舞を披露しておりました。

和知：お前も立派な姫に成長したなあ、舞はかあさまに似て素晴らしいものだ。

乙女：お恥ずかしゅうございます。とうさま、それで、お城の築城はいかがですか？

和知：それがの、なかなか上手いかなのだよ、何度も城壁が崩れての～困ったもんじゃ

乙女：とうさまなら大丈夫です、きっと立派なお城が出来上がります。

和知：お前にそう言って貰えると、明日にも完成しそうな気がしてきたわい！

乙女：まあ～とうさまったら急にお元気になられて、ほほほほ

和知：わははは おっと登城の時間じゃ！行ってくるぞ。

そそくさと屋敷を出る平左エ門、その後姿をまぶしそうに見送る乙女でした。

一方、丹羽長重は奇妙な老婆を前に重臣を集め内密な話をしていたのです。

護摩の炎を前に薄気味悪い声をあげて老婆が叫んでおります！

老婆：「大神さまからお告げがあったぞ！この地には阿武隈の竜神が横たわっておる、その上
に石垣などもってのほかじゃ！諦めなさがよい！」それを聞いた丹羽長重は

丹羽：「この城の築城は幕府からの厳命、守らねば、お家断絶、そればかりか伊達に攻められ
民も苦しむことになる、なんとか方法は無いものか？」

おっとり登城してきた平左エ門が何事かと、居並ぶ武士の後ろを長重公の側まで擦り寄る。

もう一度、祈祷を捧げる老婆は振り向きざまに、こう言いました「それなれば、牛の刻にあ
の城門を真っ先にくぐったものを人柱にするがよい、生贄を捧げれば竜神もおとなしくなり、
ましては城の守り神になるであろう」

丹羽：「皆のもの今話を聞いたか？牛の刻丁度にあの城門をくぐったものを捕らえるのだ」
それを聞いていた平左エ門、意を決したように「殿！そのような、まやかし婆の戯言に大切
な民の命を捨てさせるおつもりですか？ましてや、この刻限は大勢の民が出入りするために
城門が開くときでございます」

丹羽：「判ってくれ平左エ門よ、わしとて好きこのんで人柱など考えなんだが、これほど何度も崩れるのには訳がある、お家断絶、お取り潰しだけはなんとか避けたいのじゃ」

和知「しかし！殿」

丹羽：「すまぬ！みなのもの良く見ておくが良い、牛の刻、最初に城門をくぐるものを！例えそれが身内のものであっても覚悟を決めるのじゃ！よいな！」

大きく開いた城門の前で商人や藩士の身内のもの達が大勢待っていた、牛の刻の太鼓がドドンと鳴り響き！群衆の後に乙女の姿を見た平左エ門、「あ！」と声を上げると城門に走りながら「来るな！来るな！」と手を振ったのです。

しかし乙女には父がこっちへ来いと手を振っているように見えたのでした。

父へのお弁当を大事そうに抱え一生懸命に走り、一番最初に城門をくぐったのが乙女でした。

声にならない叫びをあげる平左エ門、がっくりと膝を突いて崩れ落ちる。。。。。

訳のわからぬまま乙女は捕らえられ竜神への生贄として人身御供となるのです。

父の為に作った食事も届かぬままに白砂の上に無残に落ちて。。。。。

白木の杭に縛られ埋められる時、一つだけ願い事を許されます。

そして乙女はこう言ったのです「わたくしの埋められたところに、大きな桜を植えてくださりませ、桜の咲く季節には母と共にとうさまに逢いに参ります。そして民も城に呼んで桜を楽しませてくださりませ」涙ながらに訴える乙女

その日の内に乙女は人柱となりました。

そうして毎年、桜の咲く頃には桜の花に生まれ変わって小峰城で舞を踊るのでありました。

その後小峰城は倒幕を迎える戊辰戦争まで竜神に守られ美しい姿を天下に誇っていたのでした。

これは、はかなくも悲しい白河小峰城、乙女桜の物語でした。